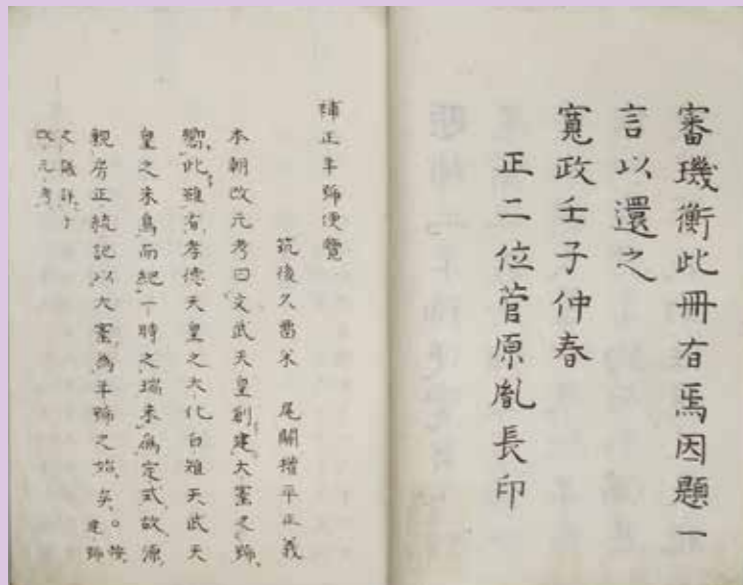


春秋彩

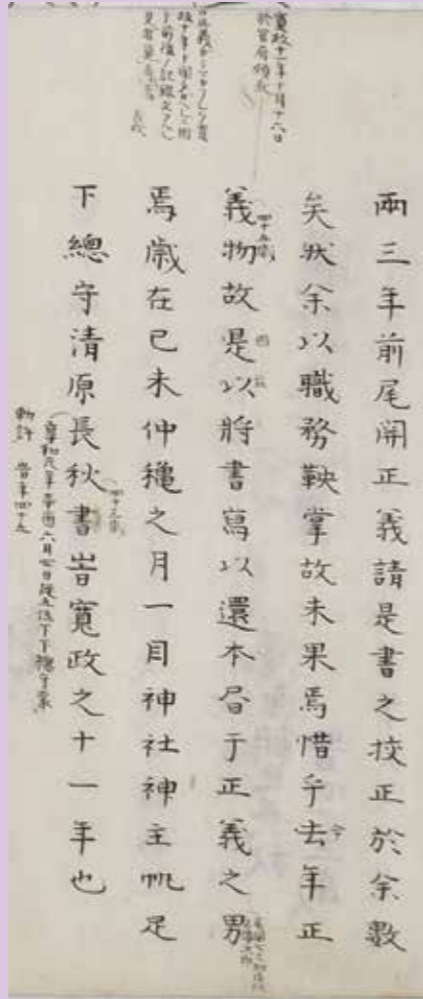
Shunjusai

vol.56

熊本県立大学広報誌

2022
Spring

巻首



巻末奥書

帆足長秋 写『補正年号便覧』

寛政11(1799)年 熊本県立大学 文学部 蔵

帆足長秋【宝暦 7(1757)～文政 5(1822)】は肥後の国学者。鹿本郡久原村(現在の山鹿市久原)の二宮・一目両社の神主を務める家系に生まれ、神職としては、奥書左端の細字に見えるとおり享和元(1801)年に従五位下下総守に叙されている。

長秋は、天明6(1786)年、寛政3(1791)年、同10(1798)年、享和元年と4度にわたって伊勢の本居宣長に見え教えを受けている。肥後の国学隆盛に大きく寄与した熊本藩士長瀬真幸は寛政5(1793)年に宣長へ入門しているが、これは長秋の志学が呼び水になってのことである。なお、享和元年の訪問時に15歳の娘京とともに宣長自筆本を転写した『古事記伝』は、その学史上の意義が評価され、熊本県指定重要文化財に登録されている。

本書は、「大宝」以降の元号と改元年次を考証したもので、久留米の国学者尾関正義の編著。権大納言であった「菅原胤長」の序文が備わり刊行も企図さ

れていたようだが写本でのみ伝わる。長秋による奥書の概要を記そう。——2,3年前より尾関正義から『補正年号便覧』の校正を依頼されていたが、職務多忙で果たせずにいたところ、惜しいことに正義が亡くなってしまった。そこで、副本を書写した上で、正義より受け取った原本を正義の息子に還すことにした——本学蔵本は長秋が写した副本。藩領を越えた学問的交流の広がりが知られる一本である。

解説:文学部日本語日本文学科 教授 米谷隆史



CONTENTS

学長退任のご挨拶	2
特集 緑の流域治水	4
活躍する卒業生	7
地域連携	8
研究活動紹介	9
国際交流	10
大学の動き	12
後援会だより	13
活き活き元気種	14
おすすめの一冊・人事情報	15
熊本県立大学アーカイブズ	16

春秋彩とは

万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

「春秋彩」へのご意見・ご感想をお待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
〒862-8502 (住所記載不要)
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学

〒862-8502 熊本市東区月出3丁目1番100号
TEL 096 (383) 2929 (代)
<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/>



熊本県立大学長 **半藤 英明** Hando Hideaki

学長の任期が3月末で満了し、文学部教授の肩書となった。任期中は多くの教職員に助けられた。感謝とともに、その恩は忘れない。学長として退職したほうがよいという方があり、関西の大学からオファーも頂いたが、4年生に大学院への進学希望者がおり、博士後期課程への進学希望者もあった。非常勤講師の依頼があり、また、短歌の結社を主宰し、古典文学の市民講座も担当しているので、結局は本学も熊本も離れがたく、本学で定年までの残る3年を勤めることにした。一教員に戻っても、本学の価値向上には尽力するつもりである。

追求してきた大学づくり

学長の就任に当たり、見据えたことがあった。大学に設置の理念があり、そのもとに具体的な組織や教育体系があるように、学長にも運営上の理想が必要であると考え、その姿を追った。本学は「地域に生き、世界に伸びる」を標榜する。このスローガンを実現し得る人々のことを想像してみた。このスローガンは独創的ではないが、素晴らしい。摩天楼で颯爽と仕事をするニューヨーカーは格好よいが、地域で暮らしながら世界と伍する活躍のできる人は、実は相当に格好よい。そのように、私たちが理想とする人間像を探すなかで、その基準となるのは見習いたい人、見習うべき人であると思った。私たちが見習いたく見習うべき偉人とは、研究、スポーツなど、どの分野でも、おそらく自主的、自律的に自己改善しながら前進し、向上することで満足すべき成果に到達した人々である。そして、たとえ成果に至らずとも、また成果が不完全でも、そうした努力を重ねる人々に私たちは魅かれ、敬意を払いたくなるだろう。自分の歩みに真摯であり、真剣である人々。敬愛される人間とはそういう人々であるだろう。そこで、たどりついた結論は、



海南大学CDC梁榮輝校長



熊本地震での学生の避難者対応

学長退任のご挨拶

世の敬愛される人間たちのように、本学が敬愛される大学になることであった。大学が高等教育機関として学問の進展と高度な人材養成をはかることは一義的に重要である。加えて、敬われ、しかも、愛される大学となるにはどうするか、それが私の大学づくりの推進力であった。その自己評価は「言わずもがな」である。世の中が判断するだろう。堤裕昭新学長には、今後とも熊本県が設置する公立大学として地域社会に信頼される大学づくりを継続的に追求し、リーダーシップを発揮して頂くよう期待する。

明け暮れた緊急事態への対応

振り返れば、6年前の学長就任直後に熊本地震があった。一昨年の夏には球磨川水害、近年はコロナ禍と、在任中は緊急事態への対応に明け暮れた感がある。大学の機能を持続的に保つことは学びの保証という観点から不可欠であり、執行部も事務局も苦労したが、その分、私としては大学における危機管理とガバナンスの重要性を痛感し、管理職の心構えと能力が少なからず身に付いた気もする。熊本地震については、あらためて怒涛の数日間をともに過ごした教職員と学生たちに最大限の謝意を捧げる。この時の稀有な経験をもとにボランティア・ステーションを設置し、学生たちの「もやいすと」精神を発揮し実働する環境づくりが叶ったのは大変良かった。大学に地域の復旧復興支援の期待があり、それが大学の使命でもあることを自覚し得たことも財産である。実は、山ほどの言いたいことがある。そのなかには愚痴も恨み節もあるが、すべて省筆とする。

球磨川水害も県や本学の施策に大きく影響した。支援の期待に応えるべく速やかに行動し、学生ボランティアの活動や各研究室による調査、提言のほか、バーチャル・キャンパス、緑の流域治水研究室を開設



蒲島知事と山田洋一郎シアトル総領事

した。これまでの経験が生きたと思うし、今後の活躍を大いに期待している。不幸なことにコロナ禍は今も継続中である。学生たちに平静の日常が提供できないことを申し訳なく思っているが、その間に学内と教育のDX化を一気に進める機運と行動が促進されたことを歓迎している。

本学の危機対応は十分に秀れている。この先に留意すべきは、学生たちの心、価値観の問題。利便性や合理性だけでは満足しないのが人間である。人間は心を育成しないと墮落する。人間を育む上で手抜かりのない想像力を本学として忘れぬようにしたい。

国際化の推進と忘れがたい思い出

私の任期中は、第三期中期目標、中期計画の期間に当たり、国際化の推進を中心的な課題としてきた。そこで、国際化戦略の拠点として国際教育交流センターを設置し、司令塔とした。人材養成を担う「もやいすと育成プログラム」に「もやいすとGlobal」の科目を増強し、語学力とともに海外体験を義務付けたことも、世界に伸びたい学生たちの学びに大いに役立つはずである。関係各位の努力により、コロナ禍でも知恵を絞り、可能な限りの教育や国際交流を継続しているのは心強い。私は既に「世界に伸びる」学生たちが羽ばたいていく姿を夢想している。世界の各地に紛争があり、すべては人間の仕業である。戦いの果てに幸せな未来はないだろう。

私は、熊本地震で見舞金を頂戴した答礼に2016年9月、姉妹校である韓国・天安の祥明大学を訪問し、日韓の問題について意見交換した。同11月にはアメリカ・ピッツバーグのチャタム大学を訪ね、MOUを締結した。2017年2月には中国・海南島で開催された博鳌(ぼあお)アジアフォーラムで講演し、これを機に海南省疾病予防管理センターとMOUを締結した。同11月には蒲島郁夫知事の随員としてアメリカ・モンタナ州を訪れた。姉妹校モンタナ州立大学を表敬訪問し、モンタナ大学とはMOUを締結した。MOUの相手である台湾の開南大学では日本語フォーラムを実施し、院生らの研究交流につなげた。



2016年9月祥明大学校訪問

それらを通じ、世界中が相互理解を必要としていると確信できた。外国との直接交流は視野と可能性を拓く。

思い出と言え、2017年10月に熊本テルサを会場に実施した創立70周年記念式典・祝賀会は忘れがたい。五百旗頭真理事長(当時)とともに気取らずフレンドリーな小泉純一郎元首相をお迎えし、原発反対の持論をお聞きした。学生たちによる大学紹介のプレゼンを熱心に聞いて下さり、声をかけて頂いた。もう一人、軟式野球部の浦田駿君が2、3年生の時に日本代表選手となり、グアムで全米代表チームと試合をした。応援には行けなかったが、ユニフォーム姿で表敬を受けた。本学を代表する自慢の学生が本当に嬉しかった。ゼミの学生なみに、忘れがたい学生の一人である。



創立70周年記念式典での一コマ



軟式野球日本代表 浦田駿君

過去を振り返るよりも、形のない未来を想像して今を生きることが私自身のモットーであるが、こうして学長の任期を回想する機会を設けて頂き、前を向いて歩むばかりではなく、たまには思い出に浸るのもよい、と感じた次第である。

特集 緑の流域治水



JST(国立研究開発法人科学技術振興機構)から、令和3年度共創の場形成支援プログラム・地域共創分野の公募がありました。多数の応募の中、熊本県立大学を代表機関とする「流域治水を核とした復興を起点とする持続社会」地域共創拠点が本格型の10年間のプロジェクトとして採択されました。本学はこの拠点の代表機関として、SDGsやウィズ/ポストコロナ時代をふまえた未来の地域社会のあるべき姿を構想し、拠点の様々な研究や活動を通し

て、被災地の復興と球磨川流域の持続的発展に寄与することを目指していきます。

10年後の球磨川流域を見据えた、持続的な地域構築のための「緑の流域治水」。



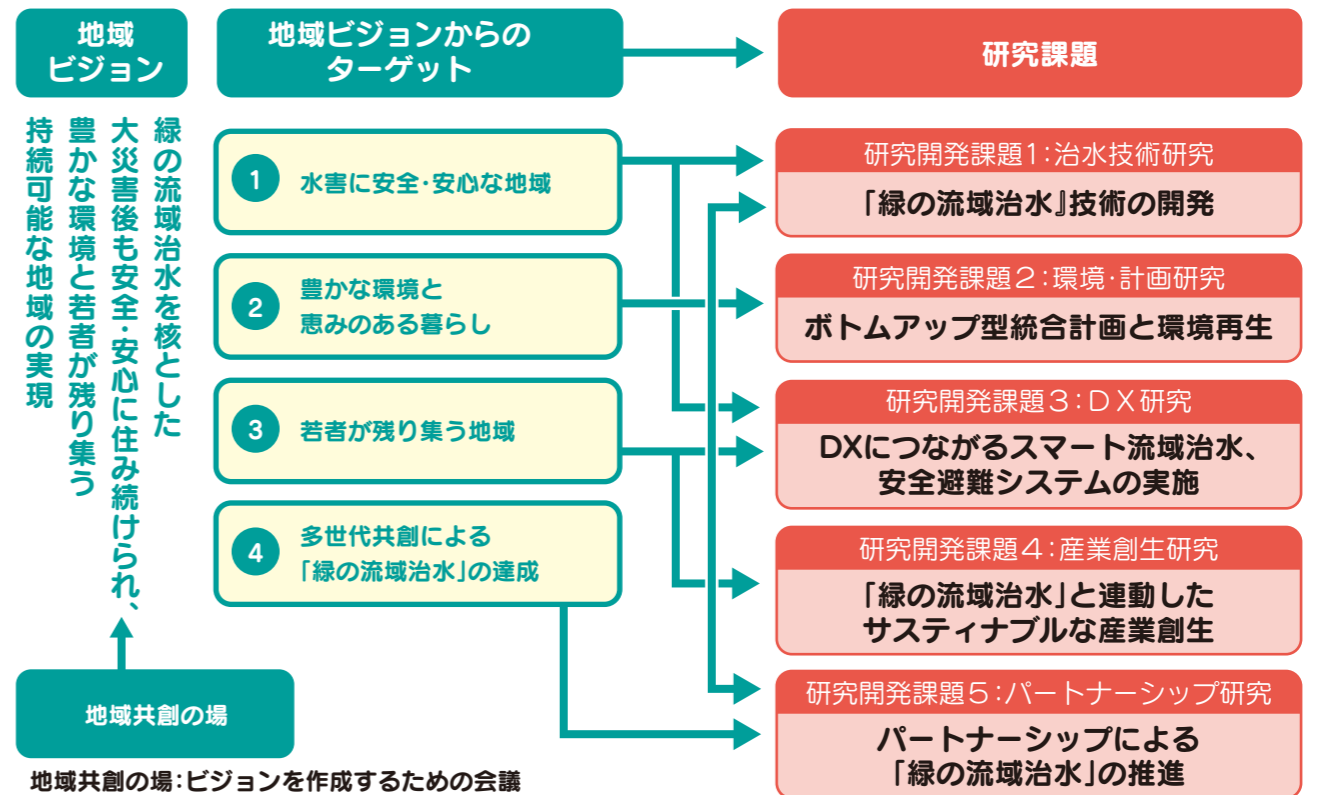
「緑の流域治水を核とした、大災害後も安全・安心に住み続けられ、豊かな環境と若者が残り集う持続可能な地域の実現」をビジョンにし、それに基づいた4つのターゲットを具体的に設定しました。ターゲットを達成するためにそれらを再構築し、5つの研究開発課題を産官学の連携により実施します。

プロジェクトリーダー 島谷 幸宏

2020年7月、コロナ禍の中で大水害に見舞われた球磨川流域。災害後においても、持続的な地域を構築するために、代表機関である熊本県立大学、幹事自治体・熊本県、幹事企業・肥後銀行の体制で、「緑の流域治水」を中心的な解決策として「復興」という課題に取り組み、産官学の地域共創拠点をづくり、解決を図るのがこの地域共創拠点です。ポストコロナ次代を見据え、10年後の球磨川流域のあり方を、安全・安心な社会、緑の流域治水の技術や進め方、豊かな環境や風景の恵み、産業創生、多様な世代の社会参画などの実践を通して拠点を形成します。

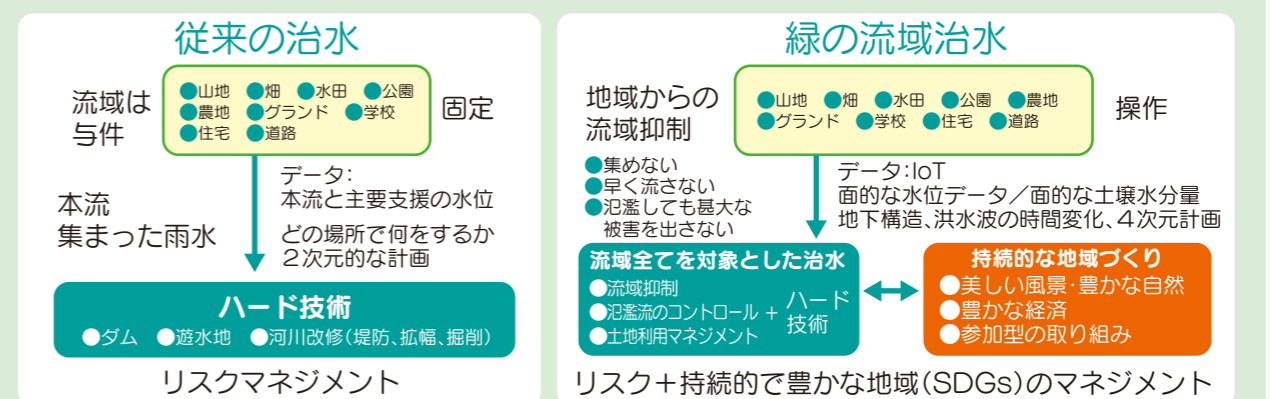
球磨川流域の持続的発展をめざし、地域ビジョンを達成するための研究開発課題。

「水害への安全・安心」「豊かな環境と恵みのある暮らし」「若者が残り集う地域」「多世代による緑の流域治水の達成」の4つのターゲットとした5つの研究開発課題、10年後にめざす地域ビジョンを基に、未来の地域を見据えたバックキャスト方式で研究開発課題を設定したことが特徴的です。



「緑の流域治水」とは？

流域全体を対象に、流域抑制、氾濫流のコントロール、土地利用規制など、建造物などのハード面だけでなく、ソフト面での対策も充実させる新しい考え方の治水対策を「流域治水」といいます。すべての場所を対象とするため、地域との協働により実施することが求められます。「緑の流域治水」はこの対策に環境的な視点を組み込んだもので、持続的な地域づくりや環境保全にもつながる治水対策です。



地域共創拠点キックオフミーティングを開催

採択が決まりスタートした地域共創拠点に関するキックオフミーティングを、11月17日に熊本県立大学にて開催しました。

午前中は本拠点のプロジェクトリーダーである島谷幸宏特別教授による全体概要と各リーダーによる研究開発課題の説明があり、会場の大ホールに会場またはオンラインにて参加された、球磨川流域の自治体の首長や職員、住民、企業や団体、研究者ら約120名が、この拠点の取組や課題について熱心に耳を傾けておられました。午後からは、研究開発課題の各リーダーによる説明とディスカッションが

行われ、会場参加者に加え、全国各地からオンラインでの参加がありました。

また、学内に設置された雨庭の見学会(写真下)も実施し、多くの方々にご覧いただくことができました。

本学はこの拠点の代表機関として、SDGsやウィズ/ポストコロナ時代をふまえた未来の地域社会のあるべき姿を構想し、拠点の様々な研究や活動を通して、被災地の復興と球磨川流域の持続的発展に寄与することを目指していきます。



【地域共創拠点】

地域大学等を中心とし、地方自治体、企業等とのパートナーシップによる、地域の社会課題解決や地域経済の発展を目的とした、自立的・持続的な地域産学官共創拠点の形成

- ◆代表機関：熊本県立大学
- ◆幹事自治体：熊本県
- ◆幹事機関：株式会社肥後銀行

[大学等]熊本大学、大正大学、(公財)地方経済総合研究所、九州産業大学、九州大学、熊本高等専門学校、滋賀県立大学、信州大学、第一工科大学、東京大学、名古屋工業大学

[企業等]アジア航測(株)、(株)建設技術研究所、(株)テレビ熊本、(株)ネオコンクリート、(株)フクユ-緑地、三井住友海上火災保険(株)、(株)ライズナー、(株)リバー・ヴィレッジ

活躍する卒業生

熊本の
にぎわいを創る
イベントを開催



パソコンに向かって資料を作る酒井さん

SAKURA MACHI Kumamoto

酒井 美京さん

総合管理学部 2020年(令和2年)3月卒業

今の仕事内容

サクラマチ クマモトで、様々なイベントを企画・運営

期待6割不安4割で臨んだ九州産業交通ホールディングスグループの入社式から、間もなく2年が経とうとしています。

コロナ禍の入社による、新入社員研修のカリキュラム変更、正式配属日の延期など予期せぬ事態も多々ありましたが、頼りになる上司や先輩方に恵まれ、業務にも慣れていきました。

入社当初は、飲食・物販を担当する九州産交リテール株式会社に所属し、カフェの運営や化粧品販売員スタッフとして研修を受けました。入社から半年後、サクラマチ クマモトのイベントチームが発足され、上司の薦めもありその部署に出向することとなりました。グループの各会社から集められた私を含む女性5名のスタッフが所属し、サクラマチ館内にて働いています。

マルシェの開催や、サクラマチ初のファッションショー・天体

観測会・街コンなど分野を問わず多くのイベントを企画・実行していきました。初めて一から作り上げたイベントも定期開催を続け、昨年12月にイベント開催1周年を迎え、常連のお客様もでき始めました。

前日夜に設営をして、イベント当日の朝早くから準備をするなど体力が必要となる業務とはなりますが、お客様から喜びの声が上がったときや、数値目標に達したときの充実感など、とてもやりがいを持って日々業務にあたっています。

お客様に求められているニーズは何かを考え、必要な知識を身に着けて、より良いイベントの開催ができるようにこれからも精進してまいります。

後輩に伝えたいこと

興味を持ったことには、とことんチャレンジ！

自分が学生時代に戻ったら何をしたいか、と考えたとき、一番に思ったことは、もっと好奇心を持って、興味を持ったことへ果敢にチャレンジすることです。

チャレンジする＝資格を取る、ということではありません。しかし、興味を持った分野を勉強し経験することが大切です。

自分が働きたい業態に必要なものが何か、働くまで分からないことも多くあると思います。そんなときだからこそ、一度興味を持ったことにはとことんチャレンジしてみましょう。そうすれば

いつか自分を助ける武器となるときが必ずきます。私自身、少し興味があり、専攻した情報デザイン科学という授業のおかげで、イベントのポスター制作をより円滑に進めることができました。経験は強みです。何が自分を将来助けるか分かりません。少しでも知識があれば、それは他の人より一歩先に出ているということです。興味があるけど、本格的に勉強するのはちょっと、と思っている方、ぜひその一歩を踏み出してください。

客員教授による オンライン公開講演会を実施しました

本学の客員教授3名の講演会をオンラインで公開しました。

国際協力のこの頃
アジア開発銀行研究所長
園部 哲史 氏



**バイデン政権下の
日米関係**
同志社大学
法学部政治学科 教授
村田 晃嗣 氏



**今こそ、
免疫力アップを
めざしましょう！**
昭和女子大学名誉教授
渡辺 満利子 氏



コロナ禍の今、オンライン受講が広く知られるようになったからこそ実施できた講演会で、多くの方に受講いただき好評をいただきました。

LINEによる情報提供始めました

LINEを使った生涯学習の受講生募集などの情報提供を始めました。

興味のある方は、是非「友だち」に追加をお願いします。
*友だち追加に当たり、個人情報の登録は不要です。



CPD講座「疫病との闘い 熊本」を 開催しました

令和3年12月、熊本県看護協会との共催でCPD講座「疫病との闘い 熊本」を開催しました。

この講座は、熊本における過去の疫病との闘いの歴史を振り返り、そして現在の闘いを学ぶことで、これからの新型コロナウイルス感染症への対応を探り、県民一丸となってこの困難を乗り越えていく機運を醸成することを目的に開催しました。

アンケートでは、「時宜を得た企画」、「過去を知り備えることの大切さを肝に銘じた」、「新型コロナとの闘いは、看護師をはじめとした医療関係者の懸命な活動に支えられていることを認識した」などの感想が寄せられました。

江戸、天然痘との闘い
熊本県立大学 文学部
大島 明秀 准教授



**大正、スペイン風邪
流行と熊本**
熊本県立図書館
学芸調査課長
丸山 伸治 氏



**令和、コロナに
立ち向かう看護職**
熊本県看護協会会長
本 尚美 氏



人工知能技術の一つである進化計算および群知能に関する研究を行っています。それぞれ生物の進化および群れの集合知に着想を得た解法です。つまり、進化する生物や、生物の群れをコンピュータ上にシミュレートし、難解な問題を解かせようというのです。その他、量子コンピュータ上で動作する量子の波動性を利用したアルゴリズム、量子コンピュータと古典コンピュータのハイブリッドアルゴリズムにも興味があります。ここでは、進化計算を紹介します。

進化計算

長い首が特徴的なプロントサウルス（推定体長20m、体重30トン）などの竜脚類は、史上最大の陸上動物であり、多くの竜脚類が大半のクジラより大きくなることが分かっています。三畳紀の原始的な竜脚類とされるパンファギアは推定体長1.6m、体重7~8kgでした。捕食者から身を守るために、長い年月をかけ僅かな変化を積み重ねて進化し、あらゆる動物をはるかに凌駕する巨体を手にしました。ただし、身を守るために意図して体を大きくしたわけではありません。自然淘汰と遺伝・変異を繰り返す中で、偶然、生存に有利な変異が進化に寄与した結果です。

進化計算では、環境を「解きたい問題」、個体を「解候補」とします。問題（環境）に適応した解候補（個体）は解決（生存）に優れた情報（遺伝子）を持つと仮定し、問題（環境）に適した解（個体）が持つ情報（遺伝子）の組み替

えと変異により、新たな解（子）を生成します。解の再構成と自然淘汰を繰り返すことで、問題の準最適解（環境に適応した個体）を得ます。

問題に適した解を得るためには、多様性が重要です。偏った情報を組み合わせても大域的に適した解を得ることができません。竜脚類には「長い首」だけでなく「早い成長率」「効率の良い肺」「骨格を軽くするための気嚢」などの特徴があり、いずれが欠けてもこれほど大きくはならなかったと考えられています。生物同様、多様性が複雑で難解な問題を解決する鍵となります。

進化計算は、カモノハシのような斬新なフォルムを持つ、新幹線N700系の先頭車両設計にも用いられました。進化計算は、陸上で生活していた恐竜が空を飛ぶという解を得たように、専門家の知識や経験に基づく発想を超えた解を発見できる可能性を秘めています。

研究活動紹介

総合管理
学部情報部門
教授
森山 賀文

プロフィール

鹿児島大学大学院理工学研究科
博士後期課程修了
博士(工学) 平成29年より本学勤務



骨格認識を活用したプロジェクションマッピング



VR認知症、ダイバーシティ&インクルージョン体験



研究室の学生との集合写真

留学生による韓国語・中国語講座を開講

熊本県立大学後援会の支援により、令和3年11月から令和4年1月までの3か月間、全9回にわたり留学生による韓国語・中国語講座を実施しました。初回は留学生も参加学生たちも緊張していましたが、回を重ねるごとに打ち解け、積極的に発言をするようになりました。講座の回数が半分以上を過ぎた頃からは、参加学生同士での繋がりも生まれ、語学に関してだけでなく韓国や中国での生活の様子など尋ねる学生も出てきました。最後の授業は新型コロナウイルス感染症の影響で、急遽対面での講座を行うことが

できませんでしたが、グループチャットで別れを惜しむ姿がありました。



ランチタイム英会話がスタート

Global Loungeでは令和3年10月から新たに、「ランチタイム英会話」を始めました。学部、学年を越えた仲間をつくり、英会話を楽しみながら語学力の向上を目指します。このイベントでは、英語のレベルを問わず、英会話に興味のある学生が集まって、いろんな話題についてざっくばらんにお喋りをします。

常駐する国際教育交流コーディネーターは、学生達に発言を促したり、必要に応じて説明を加えたりしながら、コミュニケーション能力を鍛えることに重点を置いた指導を行います。

参加した学生は、「とても楽しかった」「他の人の英語を聞くのがためになった」と話し、ほぼ毎週参加している学生もいます。



韓国・祥明大とオンライン交流会を実施

令和3年11月17日、本学が学生交流協定を結ぶ韓国の祥明大とオンライン交流会を実施しました。

本学では平成2年度より同大学からの短期研修団を受け入れてきましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で今年度はオンラインでの交流となりました。

交流会には、祥明大の学生26名と本学学生23名が参加。両大学やそれぞれの地域を紹介した後、グループに分かれて、「大学生活」、「エンターテインメント」、「文化の違い」などのトピックについて日本語と韓国語でディスカッションし、最後にグループの代表が発表を行いました。

参加した本学学生からは、「祥明大の学生さんの日本語の流暢さに驚いた。自身も韓国語の勉強をもっと頑張ろうと思った」、「交流を通じて韓国への興味が増し、留学してみたいと思うようになった」等の声が上がりました。

現在は協定校の皆様と対面でのコミュニケーションは



難しいですが、本学ではオンラインを活用した交流の実施をはじめ、さまざまな形で学生の皆さんが楽しく参加できる国際交流事業を継続していく予定です。

国連事務次長・軍縮担当上級代表 中満泉氏による特別講義



令和3年12月16日、「もやいすとしニア(グローバル)育成」科目の一環として、日本人女性初の国連事務次長であり、軍縮担当上級代表を務める中満泉氏による特別講義が行われました。

講義は中満氏在住のニューヨークと本学の大ホールをオンラインで繋ぎ、さらに学外に向けて配信するハイブリッド形式で行われました。学生及び教職員、他大学の学生及び関係者、県内の中高生及び教員合計536名が聴講しました。

最初の話は、中満氏が国連で担当する「軍縮」という仕事について。「軍縮」は、世界を安全に、戦争が起こらないようにするための安全保障のためのツールであるとし、人々になぜ軍縮が大切なのかを、人間を中心に据えて分かりやすく伝え、働きかけていくことが国連の役割だと話しました。

中満氏は、元々軍縮に関する専門知識を持っていたわけではなかったと言い、アントニオ・グテーレス事務総長からの「新しい視点で軍縮を考えてほしい」というオファーにより現職に就任。これまでの様々な経験が今の仕事に活かしていると語りました。中でもとりわけ、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) で高等弁務官を務めていた故・緒方貞子氏の「国際環境が大きく変わる中では、既存のやり方を続けるのではなく、問題を解決するために本当に必要なことを考えて実行する」という考え方は、中満氏の仕事に大きな影響を与えたそうです。

中満氏はこれから社会に出る若者たちに向けて、「紛争や気候変動等、世界で起こっている様々な問題を自分の問題と捉えて考えてほしい。身の回りの問題を家族や友人と議論し、その輪が広がることで物事は変わる」とアド

バイスを送りました。

また、本学学生からの「国際機関で働くために大切なことは？」との問いに対しては、「日本の常識が通用しないような場所でも、その違いを面白いと捉えられるようなパーソナリティが大切。自分も楽観的なメンタルを保てるように工夫している」と答えました。その他の様々な質問に対し、自身の学生時代の経験や子育てのこと等、国際的リーダーとしての輝かしいキャリアの背景にある様々な一面についても見せていただきました。



大学の動き

学生GP公開審査会表彰式を開催しました

令和4年1月11日に令和3年度(2021年度)学生GP(地域連携型卒業研究)公開審査会表彰式を学生会館1階(食堂)で開催しました。4月から約9か月間地域と連携しながら活動してきた11グループがこれまでの活動報告を含めた最終的な研究成果発表を行いました。中間報告

会に引き続き、新型コロナウイルス感染防止のため、Microsoft Teamsを使用した抄録と動画による遠隔の報告会を実施しました。学生の評価から選ばれる「学生賞」と、教職員の評価から選ばれる「優秀賞」及び「最優秀賞」を選出し、学長より賞状が授与されました。

- 【最優秀賞】佐藤研究室(佐藤工務店チーム)
「住宅ストックの有効活用」
- 【優秀賞】石橋研究室(MOTTO～藻取～チーム)
「下水処理場における最終沈殿池での藻の付着削減の取り組み」
- 【学生賞】石橋研究室(ISHIBASHIプラスチックチーム)
「プラスチック資源循環を推進するための市民意識の変革について」



総合管理学部飯村教授の教育研究がAppleにフィーチャーされました

総合管理学部の飯村伊智郎教授の教育研究に関するストーリーが、apple.comにて公開されました。

飯村教授の「テクノロジーの力で課題を解決する」というテーマで進める教育研究活動が評価されているので、各国向けサイトの各国の言語で公開されています。飯村教授は、Apple Distinguished Educator (ADE) でもあります。(画像はトップページに公開されていたときのものです)



第27回 日本生物工学会九州支部 大分大会(2021)にて学生賞(修士の部および博士の部)を受賞しました!

第27回日本生物工学会九州支部大分大会(2021)において、本学環境共生学研究所 食品バイオ工学研究室(松崎研究室) 博士後期課程3年生 河原あい さんが、【学生賞(博士の部)】を、そして、博士前期課程2年生 岡本沙樹 さんが、【学生賞(修士の部)】を受賞しました。

日本生物工学会は、1923年に設立された大阪醸造学会を前身とし、発酵・醸造の学会として設立され、現在は、発酵工学、生物化学工学、生体情報工学、環境工学、酵素工学、動物細胞工学、生体医用工学の学問領域を含み、来年には創立100周年を迎える歴史ある学会です。

- 学生賞(博士の部)受賞課題:
「Lactobacillus plantarum PUK6が
生産する多成分バクテリオシン生合成における機能解析」
- 学生賞(修士の部)受賞課題:
「環境調和型高性能バイオプラスチックの生合成」



共創の場形成支援プログラムに総合管理学部 本田准教授が参画しています



国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)が実施する令和3年度共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)共創分野・育成型に、大阪大学が代表機関となっている「革新的フードロス共創拠点」が採択され、本学総合管理学部の本田圭市郎准教授が拠点メンバーとして参画することとなりました。

この拠点は、食糧の廃棄に係る諸問題を「フードDX」を用いたイノベーションにより、フードロス削減とエシカル消費を推進させることで解決することを目指すものです。

本田准教授は、課題4「エシカル消費を通じた持続的な社会経済システムの構築」において、大阪大学やJETROアジア経済研究所の研究者と共に、イノベーションの導入の効果を文理融合型アプローチにより定量化することに取り組みます。

堤裕昭 次期学長予定者の発表がありました

令和3年11月に熊本県立大学の次期学長予定者として堤裕昭環境共生学部教授が選出されました。以下選出時の記者会見でのコメントです。



「大学のスローガン『地域に生き、世界に伸びる』に沿った形で、地域貢献をさらに高めた大学の一つの姿に加えて、熊本の域を超えた世界と直結するような羽ばたいていける人材を育成していければと思います。」

任期は令和4年4月から4年間となります。

就職活動をはじめ、多彩に学生をサポート

後援会だより

生活支援事業を継続(通算6回)実施!

学生支援課と後援会では、新型コロナウイルス感染症の継続的な影響により、生活が困窮している学生を対象に、令和3年6月から令和4年2月までに通算6回、延べ943名の学生へ食品・日用品等を配布しました。

2021年9月号の「後援会だより」に「支援物資の提供・基金への寄付のお願い」を致しましたところ、多くの保護者の皆様のご賛同・ご理解をいただき、沢山の支援物資の持参、基金への振込によるご寄付を賜りました。

改めまして厚くお礼を申し上げますとともに皆様の協力に感謝いたします。



《就職対策事業》

- 就職対策講座(公務員試験対策、就職活動実践等)の助成、資格取得及び講座受講等助成 他
- 就職セミナー・各学部による就職支援事業・在学生就職アドバイザー配置支援、TOEIC®IP学内試験への実施支援、福岡地区合同企業説明会参加助成、就職・進学写真代助成、保護者用就職ガイドブック作成配付

《学生活動支援事業》

- サークル活動費助成、白亜祭・PUKリンピック開催経費助成、体育委員会主催サマーキャンプバス代助成、全国大会等出場助成 他
- 学生用カラーコピー機の設置、コピーカード配布・販売、食育支援(学食メニュー充実)、インフルエンザ予防接種費用助成 他
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し図書館へ配置 他

《国際交流推進事業》

- 海外留学助成、留学対策講座助成、留学生による学生等向け語学講座開講支援 留学生危機管理サービス加入助成 他

《教育研究推進事業・その他》

- 共同自主研究への助成、現地学習バス借上助成、インターゼミナール大会等への参加助成 他
- 卒業式のカウン貸与、記念品贈呈 他

※新入生へは、本学合格通知の際に、後援会の説明及び入会・会費納入のお願いをしております。また未入会の方は、充実した学生生活を送るためにも後援会事業をご理解いただき、是非ご加入ください。年次途中であっても随時入会を受け付けております。

活き活き元気種

このコーナーでは地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。



実行委員会で装飾したステージ上で記念撮影

白亜祭実行委員会

委員長 秋岡早紀(総合管理学部総合管理学科3年)

オンライン白亜祭開催!!YouTubeにて生配信!

白亜祭実行委員会は、熊本県立大学の学園祭である「白亜祭」を盛り上げるべく、ステージ企画や装飾、サークル出店の管理など、白亜祭の運営管理を行う委員会です。57代目の今年は1年生51人、2年生56人、3年生36人の計143名で活動しました。

今年度、第57回目を迎えた白亜祭では、コロナ禍の影響を受け、オンライン白亜祭を開催しました。今年度の白亜祭では「Action ~新しいをここから~」をテーマに掲げました。昨年開催できなかった白亜祭を踏まえて、今年どのように「活動」していくべきなのか、私たちなりに考えて「活動」しようという意味を込めました。

学校関係者の方々と相談しながら、コロナ禍を考慮し、初の試みであるオンライン白亜祭を開催すると決めたのは、9月。このような状況下だからこそ、白亜祭を開催することで、出演して下さる方、視聴して下さる方に明日への一歩を踏み出すパワーを届けたい、そんな思いでオンライン開催を決めました。そこから約2か月、協賛企業訪問や「白亜祭における感染対策ガイドライン」の作成、それに沿った企画内容や演出への変更など、試行錯誤しながら準備を進めました。

今年度行った企画は、ミスミスター企画、カラオケ企画、おしゃれ企画、外部パフォーマンス企画、チーム対抗企画、お笑いライブ企画の6企画です。その企画の中でも、アインシュタインさんに出演していただいたお笑いライブ企画は同時視聴者数350人を超えるなど、たくさんの方にご視聴いただきました。

その他にも書道部、フォークソング研究部、歌唄(アカベラサークル)、合唱部、doDAC(ダンスサークル)、一大事(よさこいサークル)の合計6サークルに参加していただき、ステージパフォーマンス企画を実施しました。

コロナ禍で思うような活動ができず、様々な壁にぶつかりながらではありましたが、無事オンライン白亜祭を成功させることができました。白亜祭開催にあたりご支援・ご協力くださいました協賛企業様、関係者各位、そしてご観覧の皆様には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

当日の白亜祭の配信は、YouTube「白亜祭チャンネル」に掲載しております。是非チェックしてみてください!!



準備の様子。実行委員会メンバーおそろいのパーカーを着ています

白亜祭チャンネルはこちら



お一冊

現代空間美学 — 建築において美を考える —

高橋浩伸 著

出版社：花書院 出版年：2021年
ISBN-13：978-4865612448

熊本地震から6年。人は絶望的日々においても「美」を求めた。「美」こそが明日への希望の証であった。

建築において〈美〉を語ることは可能だろうか。

建築において〈美〉を語る意味はあるのだろうか。

古代より建築の主要な理念は「強(耐震性)・用(機能性)・美(審美性)」とされてきた。しかし19世紀後半に興った近代主義建築は、これら古代からの様式を否定し、機能主義、合理主義を掲げ、工業生産による材料(鉄・コンクリート、ガラス)を用いた建築を生み出した。これは、それまでの〈美の規範〉を否定し捨て去ったことを意味していた。そして21世紀の現代、この理念は「強・用・金(コスト)」へとすり替わってしまった。

この「現代空間美学」は、21世紀の現代の建築において忘れ去られた〈美〉を建築の中心的理念として取り戻すために、建築の分野だけの視点ではなく、近代以前の思想や哲学の分野で語られてきた〈美〉を反芻し、そこからさらに超越した視点での、現代における科学的アプローチ(認知心理学、環境心理学の心理学的なアプローチや、脳神経科学、認知神経科学といった神経科学的なアプローチ)の知見を基盤とした、学際的・多角的な視点を持つことで、人々に感動や心地良さを与える美的空間創造に寄与するための考え方や視点を示すことを目的とするものです。

ご一読いただけますと幸いです



環境共生学部
居住環境学専攻
教授

高橋 浩伸

人事情報

●採用 (令和4年4月1日付)

[文学部]
准教授 岩田 芳子
准教授 真島 望

[環境共生学部]
准教授 田尻 美千子
助教 田尻 絵里

[総合管理学部]
准教授 安武 綾

[共通教育センター]
准教授 松田 節郎

●昇任 (令和4年4月1日付)

[文学部]
教授 大島 明秀

[環境共生学部]
教授 阿草 哲郎
助教 中下 千尋

[総合管理学部]
准教授 岩見 麻子

●退職 (令和4年3月31日付)

[総合管理学部]
教授 松尾 隆

●令和4年度 学長等について

学長 堤 裕昭	環境共生学研究科長 白土 英樹
副学長 鈴木 元	アドミニストレーション研究科長 小泉 和重
文学部長 村尾 治彦	図書館長 江崎 一郎
環境共生学部長 石橋 康弘	地域・研究連携センター長 柴田 祐
総合管理学部長 澤田 道夫	デジタルイノベーション推進センター長 飯村 伊智郎
共通教育センター長 山田 俊	国際教育交流センター長 レイヴィン リチャード
文学研究科長 米谷 隆史	